丸昭建設株式会社

TSUNAGU 65th Anniversary

65th Anniversary

MARUSHO Construction Co.,Ltd.

with Elina Yamasaki
photo session

TSUNAGU

丸昭スピリッツを未来につなぐ

担った現場の数だけ、技術がある。

携わった人の数だけ、情熱がある。

地域への思いが、より深い知識を育み

仲間への思いが、

不可能を可能にする絆を育んできた。

65th
Anniversary

65年の歴史の中で脈々と育まれてきた

“丸昭スピリッツ”。

働く横顔から感じてほしい。

MARUSHO × Elina Yamasaki

Photo session

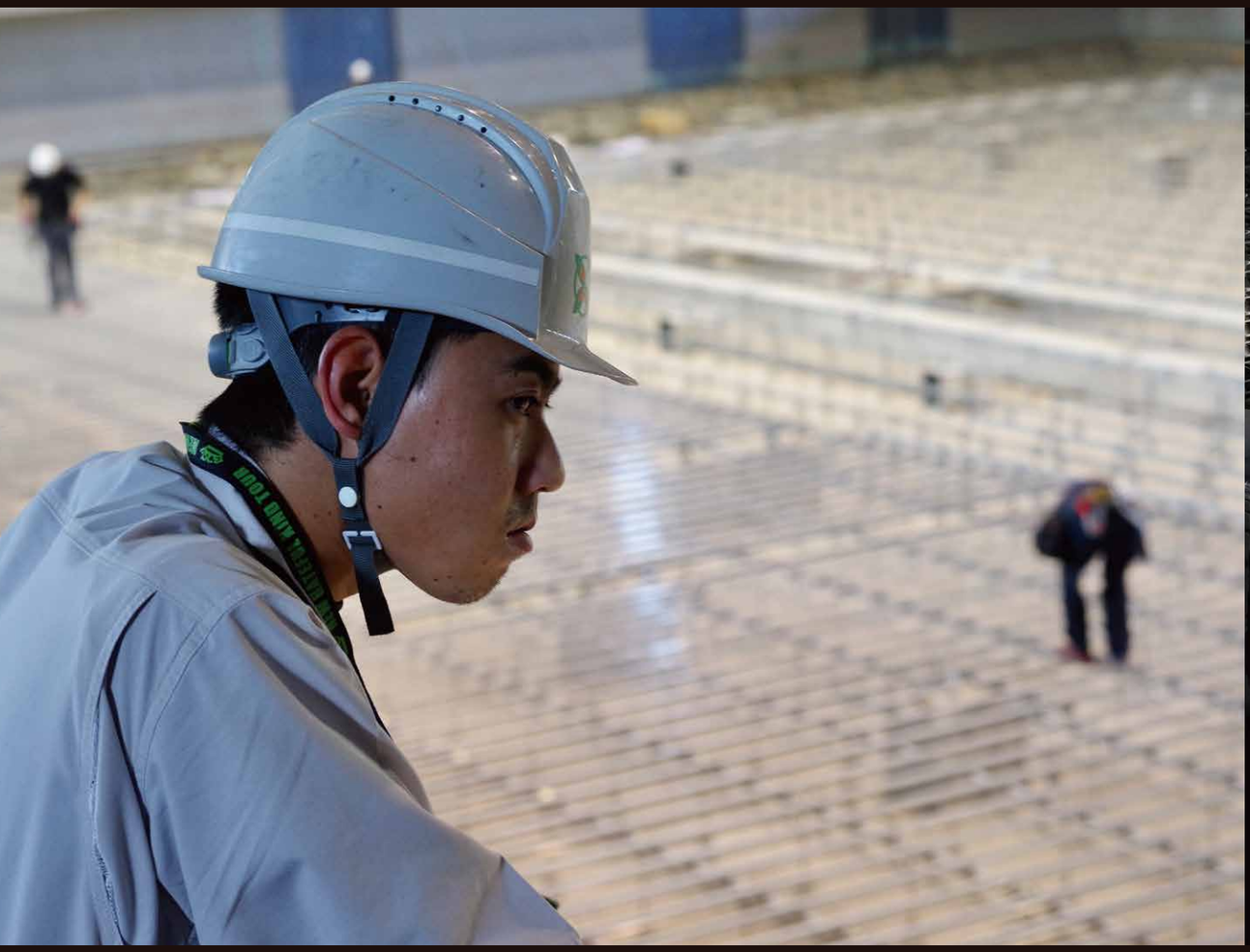
Profile

写真家 山崎 エリナ

建設業というジャンルにフォーカスし、そこで働く人々の姿を撮影し続ける。インフラメンテナンス工事の現場に密着した写真集出版、写真展も開催し、人気を博す。球磨村を舞台にした写真集『ただいま おかえり』(小学館)もある。

土砂崩れ。
指さす先には急な斜面にロープだけで繋げられた
重機と作業員が見えて驚いた。
「あんな高いところに人が！しかも作業しているとは！」
「どうやって登ったの？」疑問と驚きが頭の中で行ったり来たり、、、
斜面に倒れた木を撤去していくだけでも想像を絶する。
現場責任者の張り上げる声と指先からも
現場への意気込みが伝わってきて、頭が下がる思いになった。

のむら
JV



新たに造り出す建設のお仕事。
年月が経った建物は補修しながら頑丈になるよう守っている。
現場に立つ佇まいや表情から、地域の人たちに寄り添いながら
まちづくりをし続けてきた「誇り」を感じた。
若い人たちは先輩の背中を見ながら、
そのスピリッツを受け継いでいくのだと思うと、
表情の一瞬一瞬を逃したくないという思いに駆られ
「現場の顔」を追いかけた。

MARUSHO
Construction Co.,Ltd.

橋を繋げる、道路を繋げる。
どんな環境でも使命感を持って。
エキスパートたちの技術の結晶が
新たな頑丈な橋や道路を造り出していく。
現場の人たちの姿はたくましいヒーローに見えた。

B20

長きに渡り培われた技能
その鋭い眼差しは若き技術者へと注がれる。
背中から醸し出す力強い気合いは
「どんな環境でも負けない！」と、
立ち向かってきた功績を物語っている。

SUMITOMO

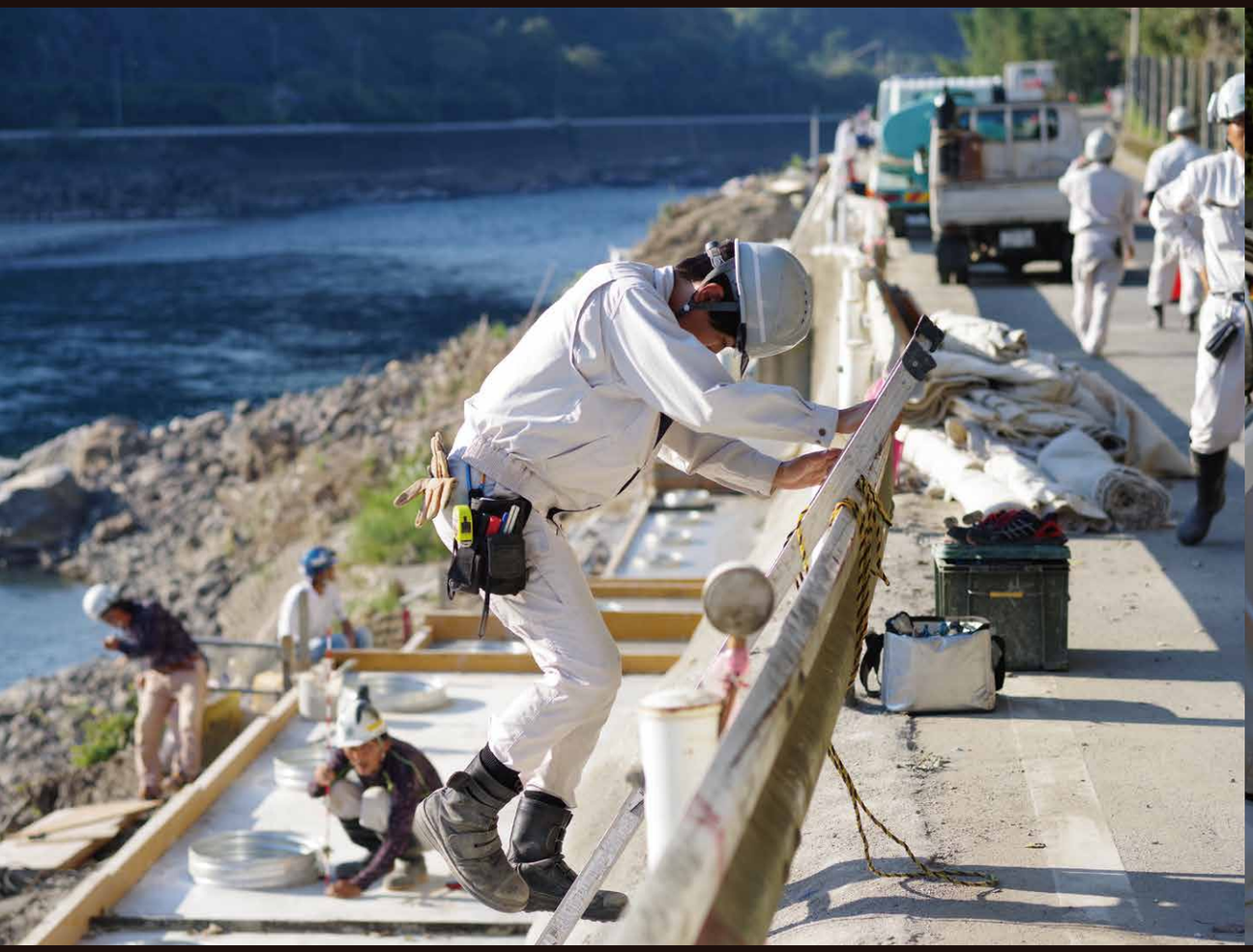
MARUSHO
Construction Co., Ltd.

監理技術者
現場代理人

たてむら
(B型)

15年前に撮影した思い出が詰まった
球磨川（球磨村・神瀬）。
災害復旧に尽力する現場のエキスパートたち。
過酷な現場と向き合い続けている姿勢に
「ありがとうございます」と、シャッターを押した。

半年前に現場であった若きエースは
すっかり肌も焼けて頼もしい顔に変わっていた。
「経験を積み重ねるって凄いことだな」と、
しみじみと感動した。



吐く息が熱く
現場を引っ張るベテランたち。
安全に作業が行われるようにと、
いつも厳しく目を光らせている。
その確かな目は私たちの安全な暮らしを
守ってくれているのだ。

MARUSHO
Construction Co.,Ltd.

Forward-Rise

MARUSHO
MARUSHO
Construction Co.,Ltd.
代理人
技術者

SH200
散水者

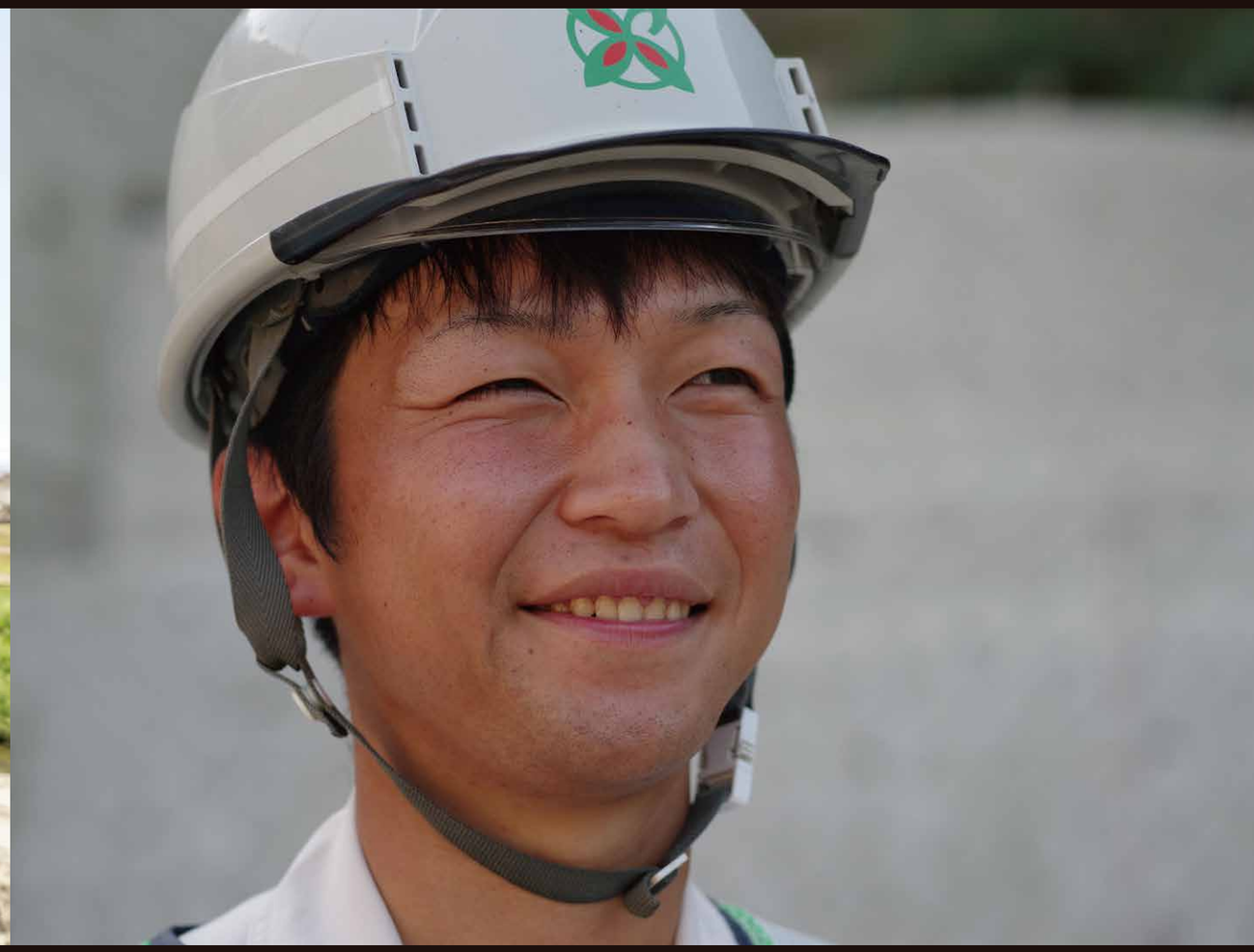
MARUSHO
Construction Co.,Ltd.

4F

道を造り、人を繋ぐ。
常に現場では真剣勝負。
写真に写る凛々しい顔と姿は
「頑張れ！！」と、私にまで
エールを送ってくれているようで
励まされる。

20

カメラを向けると、恥じらいながら笑顔がこぼれる瞬間も「人間力と人の魅力」が溢れ出ている、、、この瞬間がたまらなく好きだ。



MARUSHO
Construction Co.,Ltd.

人吉・球磨村を訪れたのは15年前。美しい球磨川と穏やかであたたかな営みがとても心地よくて、まるで私の故郷に帰ってきたような思いでシャッターを押していたあの日。

令和2年7月の豪雨災害であの美しい風景はモノクロのように色をなくし、15年前に収めた写真集「ただいま おかえり」の中の穏やかな営みは失われてしまったのか…と、胸を締め付けられる思いになりました。

今年3月に球磨村・神瀬を訪れた時には肥薩線の線路はぐちゃぐちゃになっていて、桜の木々にはまだ衣類などが引っかかっている。被害に遭った家々はカメラを向けることができませんでした。

しかし、丸昭建設の現場を伺うと、皆が汗をかきながら、最前線で立ち向かっている姿を目の当たりにして、心が救われるような思いと同時に感謝の思いが込み上げてきました。

誰よりも早く1番に大変な環境に立ち向かう建設業。そして「技術と力、信念」

現場の方々から感じる意気込みと熱量の厚みは自然災害と向き合い続けてきたからこそなのだと。

精悍な表情、時には優しく微笑む笑顔の数々、、、その表情や作業する姿からは「この地域を守り抜く、もっと強く災害に負けないようにしていくんだ！」という誇りに溢れていて、その思いに突き動かされながらシャッターを押しました。

撮影中に「豪雨災害時の現場は、想像を絶する大変さだったですよね...」と私が呟くと、現場責任者の方が球磨川を見て、遠くを見つめる眼差し、言葉は無くともそれだけで思いが伝わってきました。

こうして言葉にならない思いを閉じ込めて、現場に立ち向かっている丸昭建設の皆様は人吉・球磨村、地域の人たちにとって「心に寄り添ってくれるヒーロー」なのだと思います。

丸昭建設株式会社の65年の歴史の一コマに携われたこと、写真で記録を残させていただけたことに感謝しております。

これから続く未来へ願いを込めて、65周年の記念誌に収められた写真から溢れる心の奥底にある静かなる情熱を感じてもらえたら幸いです。

撮影にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

写真家

山崎 エリナ

大胆に挑戦し、
細心を尽くす。

昭和31年。土木・建築工事業として人吉球磨の地で歩み始めた丸昭建設。
それ以来、「地域の皆様に喜ばれるモノづくり」をモットーに、
より豊かなまちにするための礎として力を尽くしてきました。
65年の歩みを振り返ると、時代の流れは大きく変わり
我々、建設業のあり方も大きく変化しました。

スクラップ＆ビルド。
新しい時代に向けて私たちの心の柱も建て直すことが求められています。
「当たり前」に使う、道路・橋・建物。
そこには我々が携わっている誇りを胸に。
ツナグ。
その中で、決して揺らがないモノが丸昭スピリッツです。
現場で流した汗とともに培われてきた高い技術と知識を生かし、
大胆な挑戦心と細心の心配りで安全かつ確かなモノづくりに励む。

これからも熱い情熱を持って歩み
「建設業であることを誇りに思う」
という言葉を胸に未来へと進んで参ります。

Message

65年間の歴史と、
これからの丸昭建設の未来を
若い世代へと繋いでいきます。

代表取締役　松村陽一郎

65th anniversary

創業65周年に寄せて

あさぎり町長

尾鷹 一範 様

創業65周年を迎えられ心よりお喜び申し上げます。創業されて今日に至るまで日本経済が様々な成長を遂げる中にあって、建設産業の分野で地域の発展に貢献されて来られましたことに感謝申し上げます。

創業者が好んで使われていた言葉が「企業は人なり」という言葉と「可能性無限大」という言葉でした。町長として町政に携わる立場になりました現在、この言葉の意味を改めて感じております。丸昭建設株式会社は業務遂行を通して多くの人材を輩出され、その方々が建設業界のみならず各方面でご活躍をいただいております。また、政治の世界でも多くの若い政治家を育てられました。意味じくも創業65周年の節目に金子総務大臣が誕生されました。重ねてお祝いを申し上げます。現在もスポーツを通して子ども達を育成され、企業としても多くの人材を輩出されていますことに敬意を表しますとともに感謝申し上げます。

最後に、建設業界におきましても自然環境に配慮した脱炭素社会への取り組みや、AI・iot・ICTなどを活用した新しい技術の開発が求められています。これまでに培われました企業力を最大限に発揮されて丸昭建設株式会社が地域の社会資本整備に貢献いただくことはもとより、これからも建設業界の発展のためにご尽力いただき、更なる飛躍をご祈念申し上げます。

一般社団法人熊本県建設業協会

会長 **土井 建 様**

丸昭建設様の創業65周年を心よりお慶び申し上げます。

貴社は、昭和31年の創業以来、建設業を取り巻く環境が大きく変化するなか、卓越した経営手腕と高い技術力により、常に熊本県を代表する建設会社として不動の地位を築いてこられました。

社長の松村陽一郎様におかれましては、若くして社業を引き継がれると共に『県南の雄』として頭角を現され、地域業界を牽引。また、平成14年に熊本県建設業協会の理事、同22年には副会長にご就任され、この間、業界の諸問題への対応や団体運営においても大いにその手腕を発揮。特に、平成28年熊本地震、令和２年７月豪雨と未曾有の歴史的大災害時に際しては、それこそ獅子奮迅のご活躍をいただくなど、平時を含め熊本の建設業界の強力な牽引役として、その重要な役割を担っていただいております。改めまして、この場をお借りして心より感謝と敬意を表す次第であります。

丸昭建設様の今日のご発展、ご隆盛を迎えられましたことは、創業者である松村昭様と松村陽一郎様の堅実な経営と類まれなる指導力、それを支えられた社員皆様の弛まぬご精進・ご努力の賜と拝察いたします。

結びに、これまでの65年の歴史を礎として、今後益々のご発展とご活躍を心よりご祈念いたしまして、創業65周年の祝辞と致します。

HISTORY of the 65th

人とまちをつなぐ、65年間のあゆみ

創業当時の砂利部

平成18年 創立50周年

入社式

1956【昭和31年】

3月　丸昭産業建設設立（土木・建築工事業）

1962【昭和37年】

3月　有限会社組織変更（資本金 200万円）
5月　陸砂利採取及び販売業務開始

1971【昭和46年】

4月　株式会社組織変更（資本金 700万円）

1976【昭和51年】

2月　舗装工事業許可取得

1977【昭和52年】

5月　管工事業許可取得
　　宅地建物取引業務開始

1979【昭和54年】

4月　とび土工・しゅんせつ・
　　造園工事業許可取得
8月　生コンクリート製造販売業務開始

1980【昭和55年】

5月　一級建築士設計事務所 開設
12月　合材プラント共同企業体設立

1981【昭和56年】

3月　熊本支店　開設

1982【昭和57年】

5月　全国建設業協会長表彰

1983【昭和58年】

7月　建設大臣認可取得

1995【平成7年】

5月　代表取締役 松村陽一郎 就任

1996【平成8年】

3月　一般貨物運送事業許可取得

2000【平成12年】

2月　資本金増資 9,700万円
9月　産業廃棄物収集運搬業許可取得
　　ISO9001認証取得

2003【平成15年】

1月　新社屋落成

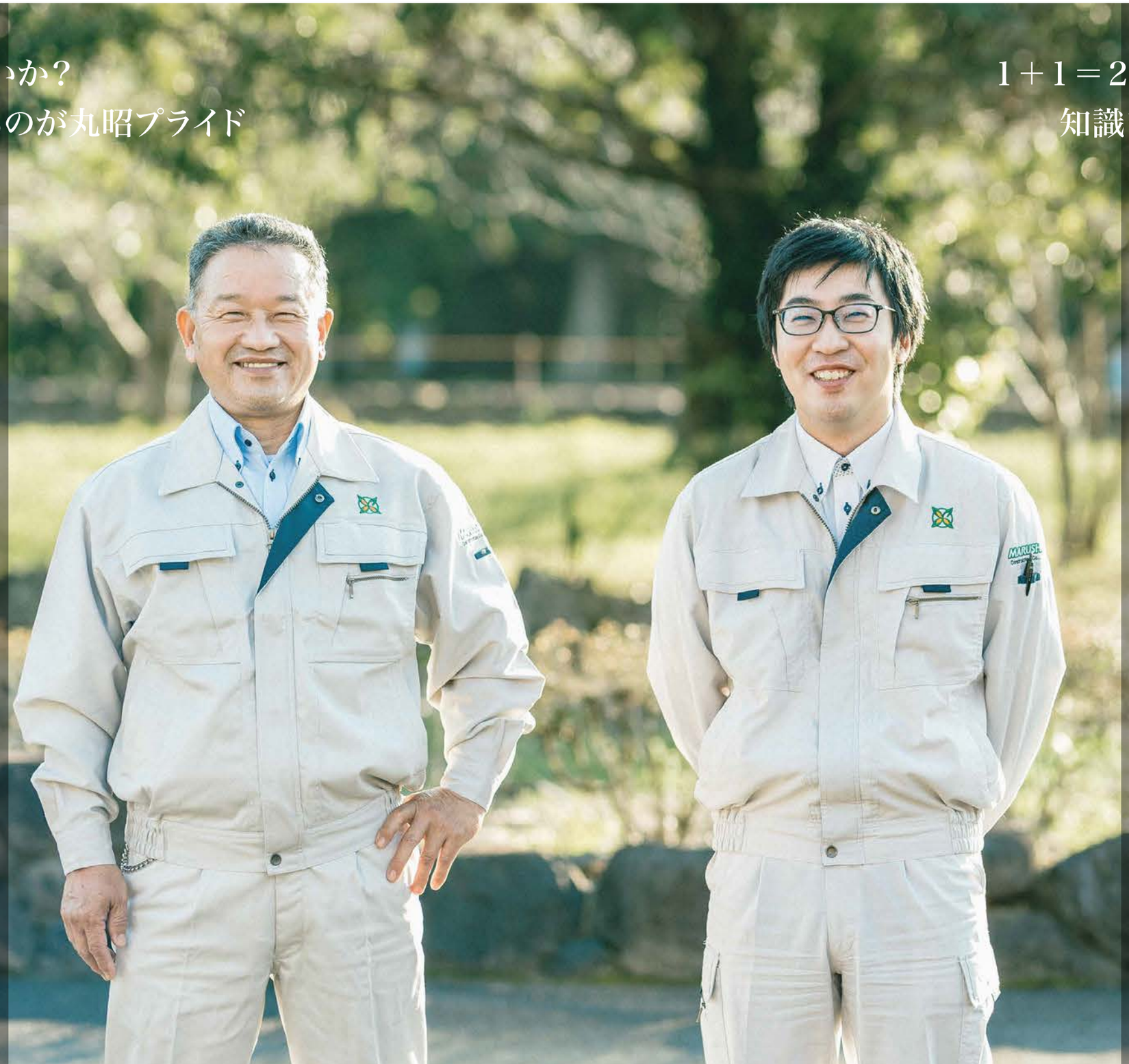
2021【令和3年】

3月　創立65周年

国道57号線二重峠トンネル貫通式

令和元年台風19号災害派遣

令和2年7月豪雨災害からの復旧復興に尽力



もっと良くできないか？
妥協なく追求するのが丸昭プライド

役員
那須 康隆
Nasu Yasutaka

高卒で入社し、60歳になる今まで42年間、丸昭一筋で現場に立ち続けてきました。丸昭の強みは、定年退職まで知識と技術を磨き続ける永年勤続者が多いこと。その理由は、「丸昭が熊本ナンバー1だ」という誇りを持っているからです。その思いを、若手に継承するのが役目だと思っています。

振り返ると、地元の人たちに愛されているランドマークをいくつも手がけてきました。あさぎり駅にあるポッポー館を建てた時は、くま川鉄道を運行しながらの工事でしたから、安全確保に神経を使いました。完成後は「街のシンボルができた」と、みなさんに喜んでもらえ嬉しかったですね。現場で大切にしていることは、「設計を100%良しとするのではなく、工事する側の声をしっかり伝えてより良いものを地元に残す」こと。その方が仕事はおもしろいし、故郷のためにもなる。それが丸昭の柱だと思って頑張って欲しい。

1＋1＝2以上にできるよう
知識も技術も磨きたい

営業部
本田 政志
Honda Masashi

福岡で建築関係の仕事に就いていましたが、子どもができたタイミングで夫婦の地元である人吉に戻ることにしました。前職の経験を生かしキャリアアップできる場所を求める中で、丸昭建設に勤める義父から「うちにこないか？」と声をかけてもらい転職することにしました。丸昭のネームバリューはかなり高く、久しぶりに会った地元の友人に「今、丸昭にいるよ」と言うと「スゲエ！」とびっくりされます(笑)。

前職は現場作業員でしたが、今は積算と畑違いです。しかも入社後すぐにコロナ、水害と想定外のことが続きましたので、予定していた研修をほとんど受けることができませんでした。そんな中でも1つ1つ知識を積み、いち早く戦力になれるように邁進中です。積算は緻密な計算の上に成り立つ仕事。何千、何億という工事を、一円でも高く獲得できるように力を尽くしたいです。

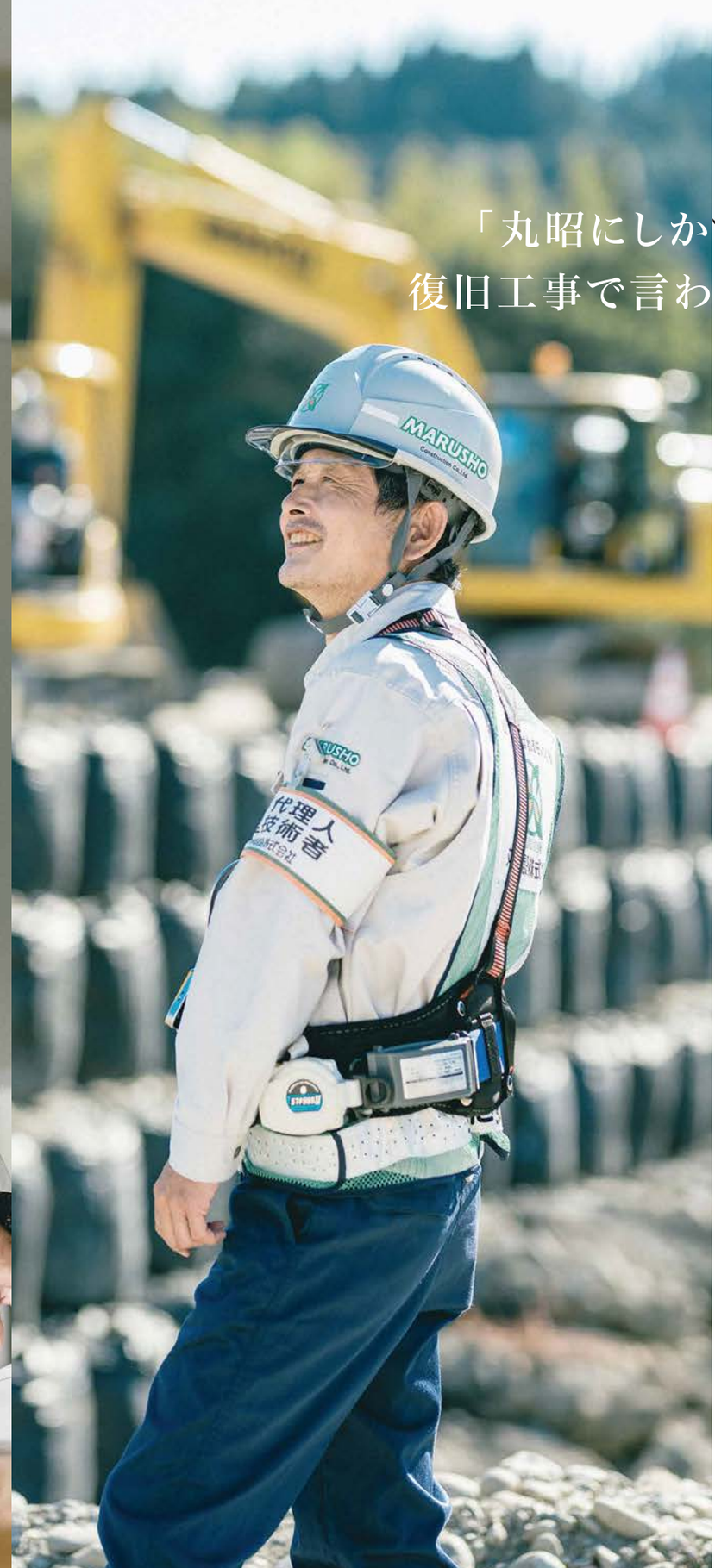
描いた図面がカタチになり地図に残る。大きな会社ならやりがいも大きい！

建築部
柳川 政博
Yanagawa Masahiro

中途で丸昭に入社し13年です。前職は人吉市で建設会社に勤めていましたが倒産。しばらく個人で積算を請け負っていましたが、「地元の大きな会社で郷土をつくる仕事がしたい」と思って転職。現在は建築設計と施工管理を担っています。

丸昭の魅力は、手がける建物が住宅や公共施設、民間のマンション、企業の社屋まで多岐にわたり、県内一円に現場があること。自分が図面に起こしたものがカタチになり、何十年もまちの景色に溶け込み、地図に残るんです。どうせやるなら大きな仕事の方がやりがいも大きい！ 完成した建物を家族や孫に見てもらい、自慢できるのも嬉しいですね。

現在59歳。65歳の定年退職までに技術継承をしっかり行い、女性２人男性６人の部署をもっと大きく活気づかせるのが目標です。新しい時代に即した機材も導入しつつ、若手がすぐに現場で活躍できる環境を整えていきたいですね。

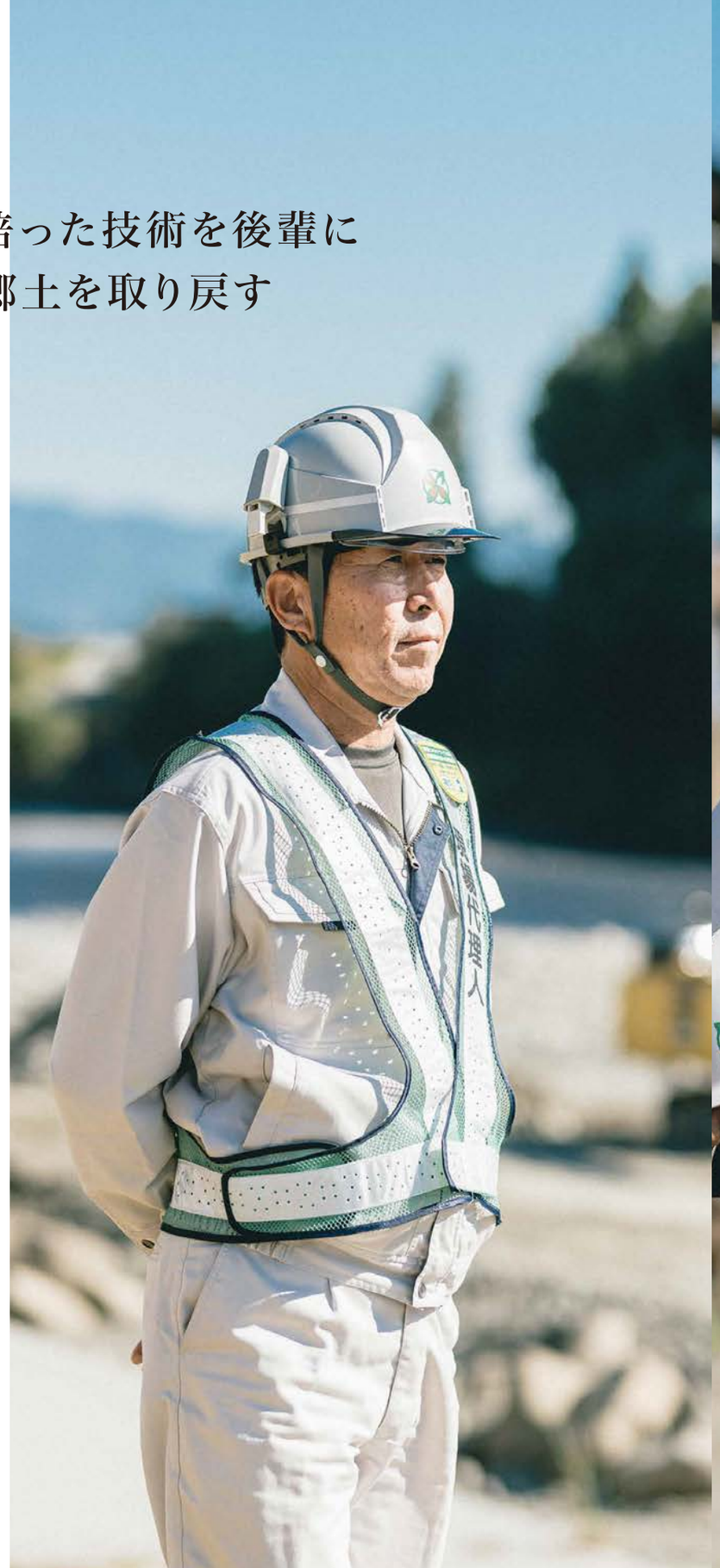


「丸昭にしかできない仕事」。復旧工事で言われた言葉が勲章

安全品質部
西 俊一
Nishi Syunichi

東京からのUターンを考えていた時、丸昭で作業員を取りまとめる世話役をしていた父から、「戻ってくるなら丸昭がいいぞ」と進められ、中途入社したのが平成10年です。人吉球磨地方は農業と建設業が経済を支えていますが、球磨川沿岸は水害を受けやすく農業にとってはリスクが大きい土地です。「建設業として安心して暮らせるまちづくりに力を尽くす」という思いで、23年間現場に立ち続けてきました。

令和２年７月豪雨の後は、球磨川の堤防決壊箇所の緊急応急復旧現場に入り、完了後は西瀬橋の災害復旧現場にすぐ移動。どちらも24時間体制で現場を動かす必要がありましたので、「どうすれば現場監督としてスムーズに回せるか？」を苦心しました。災害復旧現場は時間との戦いです。気を抜く暇もありませんが、完了時にかけられた「ありがとう」の言葉が最高のねぎらいになりました。



42年の経験で培った技術を後輩につなぎ、元気な郷土を取り戻す

土木部
上渕 英明
Uebuchi Hideaki

高校を卒業し、丸昭に入社したのが昭和55年。それ以来42年間、代理人として数々の現場を見てきました。特に印象に残っているのは、20数年前に携わった九州自動車道えびの–人吉の工事です。大畑橋の橋脚と下部工事を請け負いましたが、日本道路公団の管理が厳しく、時には徹夜しながら5～6人の代理人で作り上げた記憶があります。当時は九州全域に高速道路が伸びていく、建設業が活気づいている時期。他にも大規模工事に多数携わらせてもらいました。

10代から地元で就職し、仕事を通して「より良い地域づくりに貢献してきた」という自負があります。また、1つの現場を仲間とやり遂げる中で代え難い達成感を得ましたし、成長させてもらったと手応えを感じています。これから先は、得てきたものを後輩につないでいきたい。そして水害で流出した橋が一つずつつながり、いつもの暮らしが戻っていくのを見届けたいです。

砕石場を回すのはチームワーク。1人欠けるだけで作れない

砕石部
岡田 圭治
Okada Keiji

こう見えて、元自衛隊員です。その時に特殊自動車などあらゆる免許を取得しましたので、「資格を生かせて地元の役に立つ仕事」を探し、丸昭に行きつきました。砕石場では、建物解体時に出るコンクリートを粉砕し、毎月2,000㎥の再生クラッシャランを製造しています。

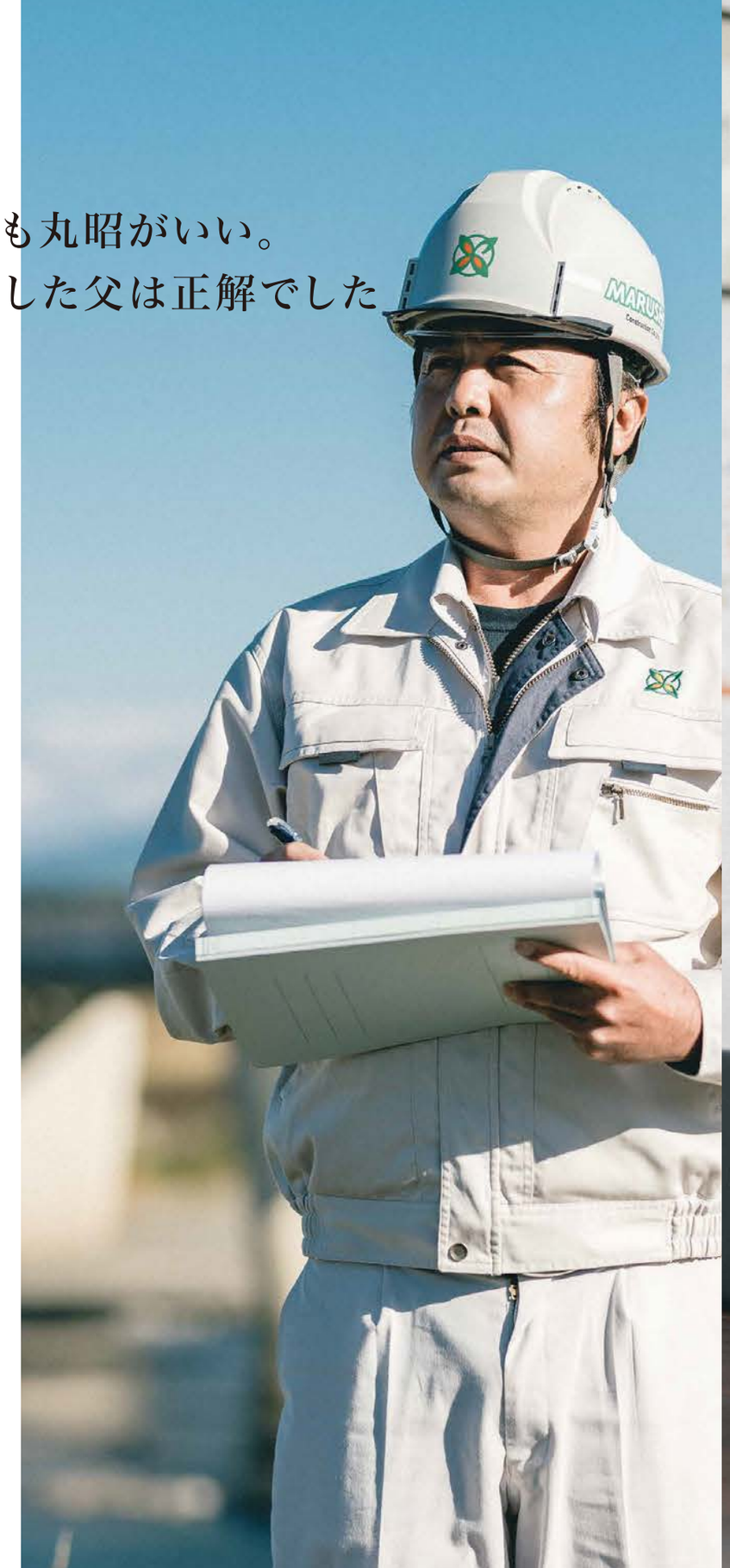
RCは路盤材として使いますから、地域の安心・安全な暮らしのためにも「納期をしっかり守ること」、「高い品質を保つこと」は不可欠です。そして、この2つをクリアするために大切なことはチームワークです。砕石場は5つのパートに分かれており、誰かひとり欠けても回すことができないからです。心を1つにすることが私の役目と肝に銘じ、日々現場に立っています。令和2年7月豪雨の際、球磨川の堤防が決壊し、緊急応急復旧を丸昭で担いました。その時は24時間徹夜で作業をしました。RCがないと現場は動きません。丸昭の起点として、これからも砕石を極めていきたいです。

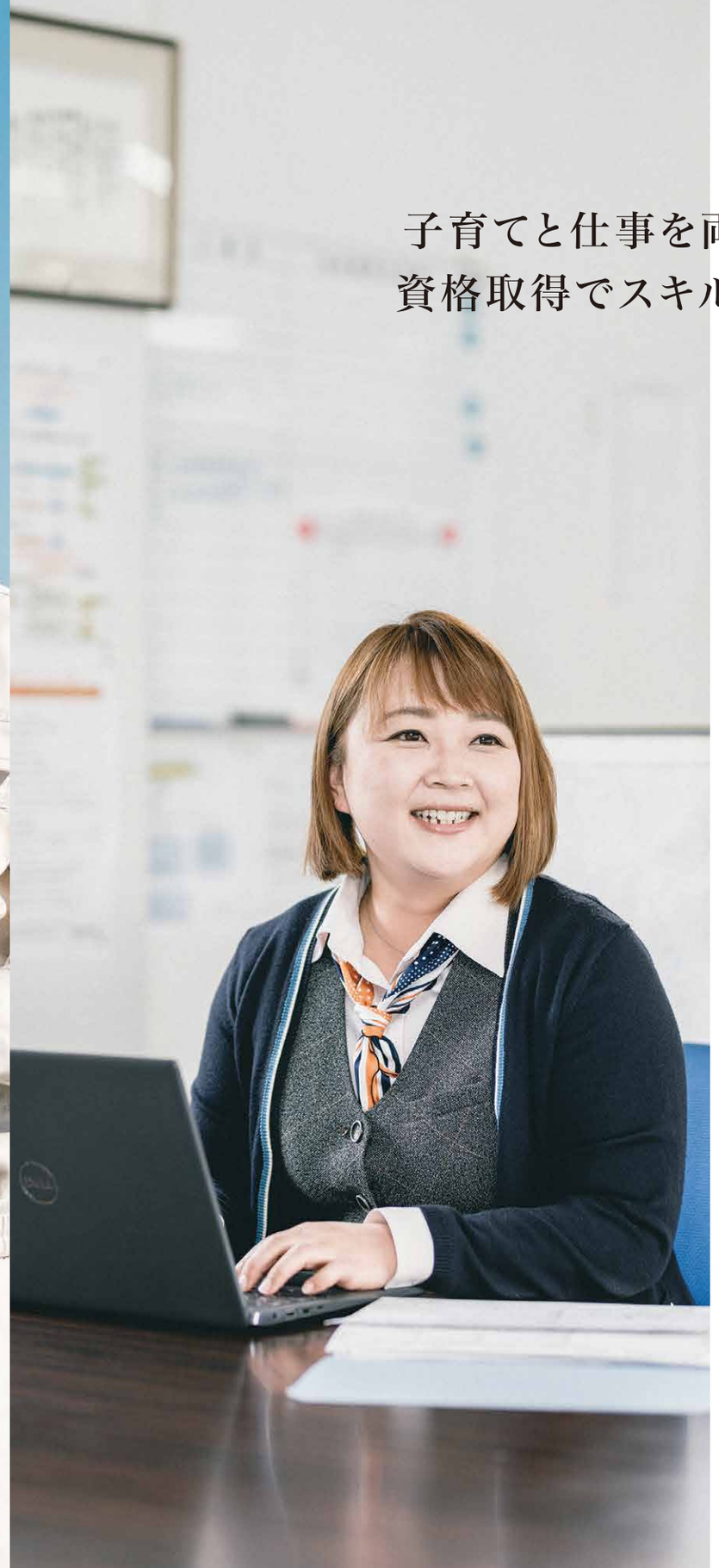
やりがいも環境も丸昭がいい。そう太鼓判を押した父は正解でした

土木部
宮﨑 大貴
Miyazaki Hirotaka

父が丸昭で作業員をしており、「地元で建設業に就くなら、大きな仕事ができる丸昭がいいぞ」と勧められたのが入社のきっかけです。現場見習いからスタートし、代理人として独り立ちしたのが25歳くらい。本当に大小多種多彩な工事に携わってきました。熊本地震後は、阿蘇で起きた大規模斜面崩壊現場に復旧工事で入りました。国道57号線と隣接している場所でしたから工事の調整が難航したのを覚えています。心が折れそうな時は、「地域の方に喜ばれるもの、発注者の都合に合うものをいち早く作るのが役目」と言い聞かせ、前を向きました。

豪雨災害後は球磨川の堆積土砂の掘削工事などに携わり、二度と被害を受けなくて済むように力を尽くしています。丸昭は実績に応じて給与・賞与に還元してくれますし、仕事のやりがいも格別。年々育っている若手に負けないように、まだまだ上を目指します。





子育てと仕事を両立できる環境。資格取得でスキルアップをめざす

事業部
伊津野 真希子
Izuno Makiko

「地元で安定して長く働ける職場」を求め、丸昭に入社して８年。３人を子育てしながら少しずつキャリアアップすることができています。印象深かった仕事は、熊本地震後に担ったJVの現場で事務を担当したことです。震災から約半年後、阿蘇に入った時は「まだこんなにひどい状態なんだ……」と、愕然としました。そこから、決められた工期の中で段階的に作業を進めていく。スケールの大きさにただただ「スゴイ！」と感動しましたし、建設業全般の流れにそった事務作業を経験でき、私自身も得るものが大きかったです。

また、令和２年７月豪雨で被災するまで、道や橋は当たり前にあると思っていました。でも、建設業が最前線に立っているから「当たり前の生活」は守られていると気付きました。この業界で働けることにやりがいを感じますし、資格取得を通してスキルアップし、現場で働くみなさんをサポートしたいです。

完成を待ちわびる地元の声が心の中の柱になる

土木部
二宮 悠河
Ninomiya Yuga

土木関係の学校で学び、先生の勧めで丸昭に入社しました。入社後すぐから見習い監督として現場に立ち5年。肌で感じることは、大きな現場を担えるやりがいと、災害復旧工事を通して地域貢献ができる手応えです。中でも、熊本地震からの復旧工事として、阿蘇にトンネルを通す現場に携わった2年半は得るものが大きかったです。JVでしたから大手他社の安全対策、長い現場における力の入れ具合のメリハリ、工事に対する考え方など、目にした全てが学びになりました。また、携わった仕事がそのまま形に残り、道を通る皆さんに見てもらえる嬉しさ(笑)。開通を待ちわびる声を多く聞いていたので、無事完成した時は肩の荷が一気におりました。

工事の現場はどんどん進化し、仕事も楽になっています。将来的には若手の活躍の場も増えると思うので、その時は中堅社員として下と上の緩衝材になり、会社をより良くするために動いていきたいですね。

足りない経験値はベテラン社員が補ってくれる！

土木部
久保田 由香
Kubota Yuka

元々、測量会社に勤めCADを使った設計を担当していました。丸昭に転職後は、営業として最初の5年間経験を積み、土木施工管理技士の資格取得を機に現場に出るようになりました。まだまだ建設現場は男性社会ですし、経験が浅いと判断に迷うことが多くキツいです……。でも私が未熟な分、周りの熟練の先輩方が目を配り助けてくださることが多く、とても心強く感じています。手厚いサポートのおかげで、一つひとつの現場を通して着実にできることが増えていると実感しています。また、トイレや更衣室など、女性が働きやすい環境をいち早く整えてくれる点も働きやすさにつながっていて嬉しいですね。

目標は、仕事をしていないようで、しっかり現場をまわせる現場監督。今後は水害からの復興工事の現場にも入る予定なので、少しでも地元の力になれるように成長していきたいです。

Recovery work

豊かな郷土を未来につなぐ

令和２年７月４日。
熊本県南部を中心に記録的な雨が降り続け、
川から越水した濁流が豊かな自然環境に恵まれた
球磨川流域を飲み込みました。
一夜にして変わり果ててしまった故郷。
失意の中、私たちは与えられたその使命感で
復旧活動にあたりました。

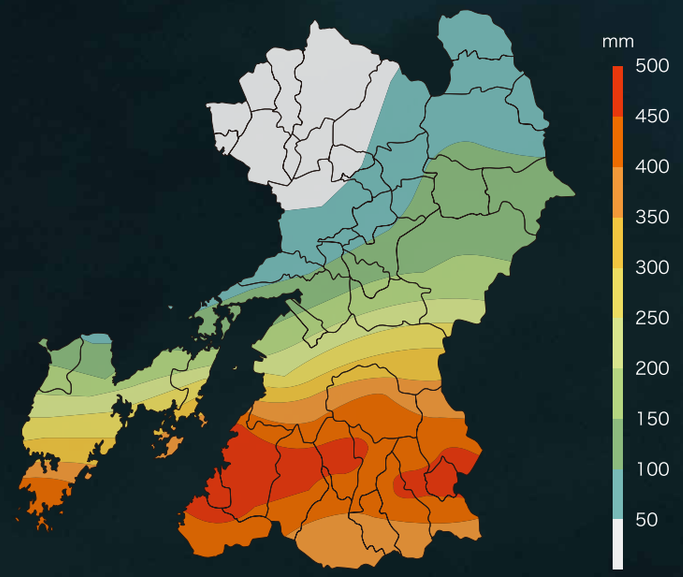
人吉市だけで全壊900棟、半壊1,449棟、一部損壊、299棟、
床上浸水268棟、床下浸水156棟という甚大な被害を受けた
（令和３年６月２日時点、人吉市調べ）（提供：国土交通省）

建設業は社会資本整備の
重要な担い手であると同時に、
地域住民にとって「いつもの日常」を守る担い手、
そして防災・減災のまちづくりを行う
担い手でもあります。

発災直後、国会議員の視察に同行する松村社長（写真中央）。
建設業協会人吉支部と連携し、迅速な復興がスタートした
（写真提供：熊本県建設業協会 人吉支部）

「建設業であることを誇りに思う」。
その言葉を胸に刻み続けてもらうために、
令和２年豪雨災害の被害状況と、発災直後から
私たち丸昭建設が担った24時間体制の
応急復旧工事を振り返ります。

■令和２年７月豪雨の概要



熊本県の降水量分布図（令和２年７月３日～４日観測）

７月４日未明から朝にかけて県の南部を中心に、１時間に約110ミリから120ミリ以上の猛烈な雨が降り続いた。24時間降水量で湯前横谷（湯前町）の489.5ミリ、48時間降水量で多良木（多良木町）の418.5ミリが、それぞれ観測史上１位の値を更新。球磨川へ流れ込んだ大量の雨は堤防を乗り越え、人吉市の中心市街地など約1,060haが浸水した。
※消防庁情報（令和２年８月17日）

■人吉市・球磨村の公共土木施設の被害状況

人吉市 （出典：令和３年３月「人吉市復興計画（第１期）」）

施設区分		発生数	被害額（千円）
公共土木施設	道路	38カ所	500,749
	河川	12カ所	305,052
	橋梁	5カ所	222,902
	下水道	7カ所	6,484,270

球磨村 （出典：球磨村HP）

施設区分		発生数	被害額（千円）
公共土木施設	道路	273カ所（30路線・延長5,866m）	145,900
	河川	67カ所（16河川）	46,600
	橋梁	10カ所	744,900
	林道	137カ所（18路線・延長3,648m）	74,000

濁流によって護岸が削られ、道路が何カ所も
崩落した（写真提供：西日本建設新聞）

24時間体制で行われた国道219号啓開工事
（写真提供：国土交通省）

濁流に押し流され、橋脚だけが残った神瀬橋
（写真提供：西日本建設新聞）

Recovery work.1

球磨川の決壊箇所の対応

7月4日

15:00

国土交通省 九州地方整備局 八代河川国道事務所 人吉出張所より巡回要請が入る。その結果、国が管理する球磨川の堤防が人吉市中神地先において1カ所、約30mにわたり決壊していることが判明。

7月4日

20:00

川辺川ダム砂防事務所で対策会議を開催。緊急復旧作業が決定。

7月4日

23:00

工事スタート。まずは道を塞いでいる土砂や流木を撤去し、大型重機を運び込める道を確保することから始まる。

7月5日

6:00

大型重機が現場に入り、本格的な復旧作業がスタート。スタッフ総勢50名でシフトを組み、交代制で24時間現場を回し続けた。

7月6日

9:00

34時間の突貫工事で30mにわたる堤防決壊を応急復旧。球磨川はまだ水位が高く、雨が降り続く中の作業だった

現場代理人
伊藤 公生

「34時間の突貫工事で30mの堤防決壊を応急復旧。業界の底力を見た！」

今回の水害は水が迫る速さが尋常じゃなかったように感じる。7月4日早朝5時、柳瀬橋の巡視に向かった時点では「いつもより水位が高いかな？」という程度だったが、昼過ぎに二度目の巡視をした際には、すでに橋は流出し堤防の法面が崩れ、堤防の上を水が流れた跡が残っていた。

4日夕方には国交省から「堤防決壊箇所の巡視要請」が入る。中神地区の八久保樋管を訪れると、全長約30mにわたり堤防がえぐられている状態。このままでは、一時的に水位が下がっても雨が降ったらまた越水してしまう。危険な状況を報告すると、すぐに緊急復旧作業に取り掛かることが決まった。

土曜の夜であることから、工事に必要な資材や人員確保が難しい状況。「すぐにスタートするのは難しいのでは？」というのが正直な感想だったが、幸いにも資材は会社の在庫、人員は協力会社により手配がつき、その日の夜から機械の搬入作業に移ることができた。ほどなく、国交省から「夜も作業ができるように」と、照明機器が届いた。ところが、大型重機を運び込もうにも流されてきた土砂や流木が道を塞いで通ることができないことがわかった。そこでまずは周辺道路の復旧を行い、堤防の応急復旧作業をスタートできたのは翌日の朝6時だった。その時、まだ川の水量は高く雨もかなり降っていた。いつもだったら絶対に作業を行わない危険な状況だ。しかし、周辺住民の安全を確保するためにもやるしかない。そこから24時間ノンストップ作業が始まった。

コロナの影響で人吉・球磨エリア以外から人員を呼ぶことができず、当社の社員はもちろん、下請け、重機会社、その他、地元のあらゆるところに声をかけて手を貸してもらった。その結果、ダンプだけで多い時には1日に20台、スタッフ総勢50人が作業に携わってくださり、6日朝9時、わずか34時間で作業が完成した。私たち建設業は今後も自然災害の危機に備えなければならない。その準備の一つに「何かあった時に駆けつけてもらえる人間関係の構築」があると痛感した。また、今回力を貸してくれた作業員の中には、20〜30代の若手もいる。この経験を生かしさらに強い郷土を作り上げて欲しい。

Recovery work.2

西瀬橋

（写真提供：人吉市）

7月4日

濁流によって流出した橋梁は、人吉市で5カ所、球磨村で10カ所にのぼった。人気アニメ「夏目友人帳」のモデルとなった西瀬橋も、橋全体の1/5にあたる約40mが流出。通学路として使われていたため、2学期のスタートに間に合わせるように工事がスタートした。

仮設工事及び橋梁下部工事を当社、上部工事を専門業者が請負っていたためそれぞれが連携しながら24時間ノンストップで作業が進んだ。

（写真提供：国土交通省）

9月4日

6:30

2学期の初日、一般車および歩行者の通行が可能になった。それまで遠回りを余儀なくされていた地元住民が笑顔で橋を渡る姿が印象的。

常務取締役
松村 健由

「人命も暮らしも『道』があってこそ。それを守るのが建設業」

「災害復旧の最優先事項は道を通すこと」。今回の豪雨災害を受けて、改めてそのことを痛感した。道が通らないと被災状況を把握することができないし、救助のための緊急車両も自衛隊も通れない、支援物資すら届かない。まさに復興への歩みを、一歩も進めない状況だ。そして、地域住民の「いつもの暮らしを守る」という意味でも、道を通すことは不可欠だ。

例えば西瀬橋。ここは地域の子どもたちの通学路だが、全長約200mの一部、約40mが橋桁まですべて流されてしまった。橋がないとかなり遠回りをして登校することになるため、国から「緊急的に通してほしい」という要請が入った。完了目標は、2学期の始業式が始まる9月4日。発災からちょうど2カ月後だから時間がない。スピードアップを図るため、三重から500トン重機をわざわざ運び入れ、すぐに24時間体制の工事がスタートした。当社は工事用進入路・施工ヤード造成及び橋脚基礎を担当、橋桁はまた別の業者が担当という感じで、それぞれが連携しながらノンストップで工事が進んでいく。今回得た経験、知識、結束力は大きな財産になると思う。今後、より強いインフラ整備に生かしていきたい。

9月4日朝6時半、無事に一般車両と歩行者の通行が再開した。開通式に私も立ち合わせていただいたが、地域の方から「今日から遠回りしなくていいので本当に助かりました」と声をかけていただき、思わずうるっとくるものがあった。正直、現場は危険と隣り合わせだったと思うし、体力も気力もギリギリの中で作業を遂行してくれたと思う。発災直後から最前線に立ち続けてくれた社員、協力会社の皆さんがいたからこそ、ここまで復興を押し進めることができた。そのことに感謝を伝えたい。そして、私たち建設業が道を通すことで、「人命」と「いつもの暮らし」を守っているという誇りを持って欲しい。

WORKS

地域の発展と豊かな暮らしをつなぐ、主な施工例

道路や河川などのインフラ整備を通して「安心して暮らせるまち」の礎となる土木工事、
ご要望に応じて強固な建物をつくり「地域の発展」につなげる建築工事。
その両輪で九州の今を築いてきました。

■道路改良

工事件名
平成30年度災害復旧
小森地区改良外工事

発注機関
国土交通省熊本復興事務所

施工場所
熊本県阿蘇郡西原村

竣工年月
R2.3

工事件名
国道445号（九折瀬工区）
活力基盤交付金
（道路改良２）工事

発注機関
球磨地域振興局

施工場所
熊本県球磨郡五木村

竣工年月
R2.3

■砂防堰堤

工事件名
布田川28年発生砂防災害復旧（熊本地震・第7661号）工事

発注機関
熊本県土木部

施工場所
熊本県阿蘇郡西原村

竣工年月
R2.3

■トンネル

工事件名
熊本57号災害復旧二重峠トンネル（阿蘇工区）工事

発注機関
九州地方整備局

施工場所
熊本県阿蘇市

竣工年月
R2.7

工事件名
九幹鹿、三池Ｔ（南）他１

発注機関
九州新幹線建設局

施工場所
熊本県玉名郡南関町

WORKS

■高速道路・インターチェンジ

工事件名
九州自動車道瀬高工事

発注機関
西日本高速道路(株)九州支社

施工場所
福岡県みやま市瀬高町本吉～
山川町河原内

工事件名
九州横断道(嘉島～山都)玉来地区改良7期工事

発注機関
国土交通省熊本河川国道事務所

施工場所
熊本県上益城郡御船町

竣工年月
H29.9

■法面工

工事件名
阿蘇管内治山激甚災害対策
特別緊急事業第16号工事他合併

発注機関
熊本県農林部

施工場所
熊本県阿蘇郡南阿蘇村

竣工年月
R1.6

発災直後の崩落状況

■法面工

工事件名
国道445号防災安全交付金
(災害防除)その1工事

発注機関
球磨地域振興局

施工場所
熊本県球磨郡五木村

竣工年月
R3.5

■河川

工事件名
黒川流域治水対策河川(社会資本)(内牧護岸24)工事

発注機関
熊本県土木部

施工場所
熊本県阿蘇市

竣工年月
R2.3

工事件名
黒川河川激甚災害対策特別緊急
(宮原川左岸盛土2)工事

発注機関
熊本県土木部

施工場所
熊本県阿蘇市

竣工年月
H31.1

WORKS

■橋梁(上部工・下部工・補修)

工事件名
平成29年度災害復旧熊本57号
黒川避溢橋下部工(その2)工事

発注機関
国土交通省熊本河川国道事務所

施工場所
熊本県阿蘇市

竣工年月
H30.5

■舗装工

工事件名
令和元年度千代地区舗装修繕外工事

発注機関
国土交通省熊本河川国道事務所

施工場所
八代維持出張所管内

竣工年月
R2.3

■建築工事

工事件名
JA熊本市本店新築工事

発注機関
熊本市農業協同組合

施工場所
熊本県熊本市中央区南熊本

竣工年月
R2.11

工事件名
南陵高校(球磨地区新校B)
食品科学科実習棟新築工事

発注機関
熊本県土木部

施工場所
熊本県球磨郡あさぎり町

竣工年月
H31.1

工事件名
シティライフ大江東新築工事

施工場所
熊本県熊本市中央区渡鹿

竣工年月
H30.3

工事件名
上球磨消防組合消防庁舎改築工事

発注機関
上球磨消防組合

施工場所
熊本県球磨郡多良木町

竣工年月
R1.8

to the Future

65年の歩みを明日につなぐ

平成28年4月、震度7の揺れを2度観測した「熊本地震」。

我々の故郷人吉球磨を襲った「令和2年7月豪雨」。

目を疑うような災害が2度も熊本を襲いましたが、

心を痛める暇もなく、

我々は災害対応の最前線に立ってきました。

地元事情に精通した建設業は、

復旧に向けて大きな役割を担う存在の一員です。

ひとたび災害が発生すれば、

そこには必ず私たち建設業がいる。

そのことが、安心安全な生活を願う

地域住民の拠り所となるように。

防災・減災のため、地域の発展のために、

未来へバトンをつないでいきます。

丸昭建設株式会社 65周年記念誌
TSUNAGU

令和3年12月発行

発行　丸昭建設株式会社
熊本県球磨郡あさぎり町上北251
TEL 0966-45-0046
FAX 0966-45-2972

制作　65周年記念誌 実行委員会
伊津野 真希子
竹村 信子
那須 日出香
松崎 悦子
松村 健由
宮崎 大貴
吉田 和宏

チーフプロデューサー／荒木 久尚（共栄コア）
プロデューサー／川内 綾
アートディレクション・デザイン／立野正継
ディレクション・テキスト／東上真弓
写真・エッセイ／山崎 エリナ（P02〜P63、65、P79、P92）
写真／マエダトモツグ（P70〜P78）